

CL 寓話

—A Handbook for Constructive Living から「行動が人生を動かす」に掲載されなかった寓話—

David K. Reynolds, Ph.D.

寓話は CL の法則をいろいろな違った角度から見る機会を提供しています。寓語には教えの知恵が詰まっています。説明つきと説明なしがあります。CL の考えによって描かれた世界の大きな絵の中で物語がどう調和しているか、世界によって CL の考えがどう描かれているか、おわかりになりますか。(p 148)

—墓地—

その発想は簡単なものでした—死ぬ前に墓地に来て、死後、自分の身体を休めるところに馴れ親しむというものです。その徹底ぶりは、それぞれの墓に鍵付きのシェルターを用意し、「永遠の住処」となる自分の棺桶が心地良くなるよう横たわってみるのです。この発想は葬儀事業における「あらかじめ必要な」構想の自然な結果として出てきたものです。

ソラスの市民が週末にやってきて、いつか隣人となる人同士でおしゃべりをしたり、瞑想をしたり、居眠りをしたりしました。他の人の墓と交換して慣れ具合をチェックする人もいましたが、ほとんどの人は、自分の墓に他人を入れるなんてとんでもないことでした。カップルは隣接した棺桶で手を握り合っていました。子供たちは去年のズボンのように棺桶より大きくなっていました。墓地にはまだあの世に旅立っていない人たちのために駐車場や売店、トイレがありました。実業家たちは、自分たちの墓地を手に入れるまえから、すでに数億円を儲けていました。一時の流行が瞬く間に驚くほどの数に広がり、いつか訪れる死の列に並ぶために押し寄せる人々で、週末は交通渋滞が起きました。「うららか界限」の通路 3 で子供がわめき声を立てている以外は、平和でした。幸いなことに、「平静コミュニティー」の墓は防音装置が施されていました。人並み以上、本物の価値、投資。

ともかく、人は死にました。(P.150)



[目次へ戻る](#)